

子どもの心的理解の発達を支えるものとは

—養育者の敏感性及びmind-mindednessの役割—

篠 原 郁 子

1. はじめに

自他の心の理解について、子どもがそれを如何に発達させるのかという問いは多くの研究者の関心の的となってきた。特に、霊長類研究に端を発した所謂「心の理論」研究は、この20年に亘り発達心理学における最も精力的な領域の一つであり、広範な知見が蓄積されてきたと言えよう。「心の理論」とは、人々の行動を心的状態（信念、欲求、意図など）に関連付けて理解、説明、予測するための枠組みであるとされる。そしてこの「心の理論」を子どもたちがいつ、どのように獲得するのかを明らかにすべく多くの実証研究が行われてきた。例えば「誤信念課題」（人は信念に基づき行動しているが、その信念は時に現実とは食い違うものでありうることを理解を問う）を始めとする多様な実験パラダイムが編み出され、様々な年齢の子どもたちを対象に実施されている。そして多数の研究結果から、一般的に4～5歳前後において実験課題への正答率が上昇することが示され、この時期に「心の理論」が獲得されるという説が当初、研究者間で合意を得ていったのであった（e.g., Wellman, Cross & Watson, 2001など）。

しかし、実験場面から一步離れ日常生活に目を向けた研究からは、より幼い子ども達の心的世界との交流を示唆する結果が提示されている。例えば、言語獲得から間もない2歳児が「欲求」や「感情」に関する発話を行い、3歳になるとさらに「思考」「認知」状態に言及することが見出されているのである（Bartsch & Wellman, 1995; Bretherton, 1991）。加えて、2歳児が他者の知識や信念を操作しようとする言い訳や欺き行動を見せることも指摘されている（Dunn, 1988など）。これらの発話や行動は、実験課題に正答するとされるよりも幼い子ども達が既に、自分そして他者が目には見えない心的世界というものを有していることに気づき始めていることを示していると考えられよう。

そして現在、研究関心はさらに早期の乳児期にまで拡大している。例えば、生後1年目の後半に見られる三項関係の成立に際して、他者に対する指差しや呈示、要求などの原叙述的コミュニケーション行為の産出は他者への意図的な伝達の開始とみなされ、9～12ヶ月児がある程度の意図性を備えるのだらうと考えられている。また、この時期に同期して見られる「共同注意」（他者の注意の所在を察知し自分の注意を重ね合わせる）や、「社会的参照」（ある対象に向けられた他者の心的状態を読みとることで自己のそれを調整する）の発現は、他者の心との出会いと理解の現れとして注目される場所である（e.g., Gopnik & Melzoff, 1994）。そして、ある一群の研究者は乳児期におけるこれらの行動の発現に、「心の理論の先駆体（precursors of theory of mind）」（Tomasello, 1995）、あるいは「潜在的心の理論（implicit theory of mind）」（Bretherton, 1991）を仮

定している。

このように研究関心は幼児期から乳児期へと拡大し、心的理解の発達は今や、乳児期から始まる継続的、漸次的プロセスとして把握されている。そして、その発達の詳細なタイムテーブルが徐々に明らかにされつつあるのである。

2. 普遍的発達の描写から個人差への関心へ

では、このような心的理解の発達は如何なる機序により進行するのだろうか。従来、「心の理論」の獲得メカニズムに関しては複数の理論モデルが提唱されてきた。その主たるものとして、以下の3つが挙げられよう。まず、「モジュール説」は多くの子どもがある年齢に達すれば普遍的に「心の理論」を獲得するに至ることに關して、それを可能ならしめる生得的なモジュールの存在を仮定している (Baron-Cohen, 1995; Leslie, 1994)。一方、「理論-理論説」では、子どもが他者との社会的経験に基づいて心に関する推論、理解を除々に進め、それらを統合して心を理解する理論を能動的に形成していくと考えられている (Perner, 1991; Astington, 1993; Gopnik, 1996)。また「シミュレーション説」では、自分が他者の立場に置かれたときの心的状態を想像する、すなわちシミュレーションすることによって他者の心を理解するに至るとされている (Harris, 1992)。無論、これら心的理解の発達に關するメカニズムについては議論が未だ続いており、全ての理論的要素の集合体がより適切な説明をなすものではないかと述べられている (Flavell, 2002)。しかし、特にモジュール説に代表されるように従来の研究においてはその多くが、心の理解が個体内で如何に成熟し進行していくのか、すなわち何歳になれば何が如何なる形で理解できるようになるのかという普遍的・一般的な発達の里程碑の解明に主眼を置いてきたと指摘できよう。

ところが一方で、こういった研究動向に対し新たな疑問を投げかけるような知見も見出されている。例えば「心の理論」の獲得に關して、それはある一定の年齢に達すれば一斉に獲得されるという画一的なものではないことを示唆する研究結果が寄せられるのである。Jenkins & Astington (1996) は3～5歳半の子どもを対象に誤信念課題を実施した結果から、「心の理論」の獲得は漸次的に進むものであり、加えてその進行具合には子どもたちの間で広範なばらつきが見られることを指摘している。さらに子どもの心的語彙の使用開始時期 (Brown & Dunn, 1991)、欺き行動 (Dunn, 1996) といった心的理解を伴う諸行動の出現時期においても、実際には子どもによってかなり幅広い差異があることが示されている。これらの知見はすなわち、心的理解の発達の進行には無視することの出来ない個人差が存在することを指摘している。そして、心の理解に關する初期の研究が一般的な発達の姿の記述に關心を集中させていたことに対し、従来等閑視されてきた発達の個人差に注意を向けることがより重要であると考えられるようになっているのである (e.g., Bartsch & Estes, 1996; Dunn, 2001; Repacholi & Slaughter, 2003)。

3. 心の理解の発達と社会的環境

心の理解の発達における個人差への注目は、個人差の先行因、他の社会・認知的発達との関連、あるいは心的理解の差異がその後もたらす発達の帰結への関心などへと拡大しつつある。だがそ

の中でも、心的理解の発達プロセスにおける個人差の存在がそもそも如何なる要因により説明されるのかという問いは深く、個人差の規定因について大きな関心が寄せられている。こうした流れの中でとりわけ注目されているものの一つが、社会的環境からの影響であろう (e.g., Dunn, 2001)。その背景には、心的理解の発達を個体内に閉じたものとする、すなわち子どもを文脈から切り離された、生得的なメカニズムに基づく孤独な学習者として捉えることに対する疑問があると考えられる。子どもは日常生活において、他者（それは多くの場合、子ども自身よりも進んだ心的理解を有し、子どもと心的交流を持つ）との社会的関係性という文脈の中に生活しているのであり、子どもが経験する周囲の環境との相互作用が持ちうる影響について詳細に明らかにしていく必要が叫ばれているのである。

そしてこれまでに、社会的環境に関して家族やきょうだいに着目した研究が実施され、多くの知見が寄せられている。例えば子どもの家庭について、社会経済的地位 (e.g., Cole & Mitchell, 1998)、母親の教育歴 (Cutting & Dunn, 1999) などが子どもの「心の理論」課題の成績と関連することが見出されている。さらに、子どもと家族との社会情緒的関係に関するものとして注目値するのは、家族における心的状態に関する会話の多さ (Dunn, Brown, Slomkowski, Tesla, & Youngblade, 1991)、きょうだいの数の多さ (Jenkins & Astington, 1996; Perner, Ruffman, & Leekam, 1994)、特に年上のきょうだいとのやりとりの豊富さ (Ruffman, Perner, Naito, Parkin, & Clements, 1998) などが「心の理論」課題の優れた成績と関連を持つことが示されていることである。これらの結果は、心的状態をめぐる家族との会話、あるいはきょうだいの多さに必然的に伴う葛藤やその解決（相手の心的状態を理解し、時にそれを操作することも必要となる）の経験など、心的世界に絡む日ごろの社会的経験の豊富さが子どもの発達に影響を与えていることを示唆するものと考えられよう。

しかしながら、これまでの研究は相対的にきょうだい間のやりとりに注目したものが多く、それ以外の家族成員による直接的な影響はあまり問題にされてこなかったことが指摘できよう。だが、きょうだいの有無あるいは家庭の社会経済的地位に拘わらず、殆ど全ての子どもは養育者との間に関係性を取り結ぶ。その関係性は子どもが有する最も早期の、そしてその後も連綿と続く非常に緊密なものであると考えられ、その意味からすると当然ながら養育者と子どもの二者関係が有しうる影響を正當に問う必要があると言えよう。そして近年、複数の研究者によって心の理解の発達と子ども - 養育者の関係性との関連を検討する試みが開始されている。そこで次に、この関係性に着目した研究知見を概観していくこととしよう。

4. 心の理解の発達と養育者との関係性

養育者と子どもの関係性が持ちうる影響について検討が行われる中、現在特に注目されているのが、その関係性の質に関する代表的な指標とされる愛着関係である。Bowlbyによって提唱された愛着理論は、後にAinsworthらによって子ども - 養育者関係について愛着の安定性に着目した質的分類へと展開された (Ainsworth, Bell, & Stayton, 1974)。そして、安定型と不安定型（下位分類としてさらに3つのタイプが設定）に分類される愛着関係の質と、子どもの多様な認知的、社会的能力との関連が長年に亘り問われてきたという歴史がある。その中で、愛着の安定性と心

の理解が本質的に絡むような諸行動についても複数の関連が指摘されてきた。例えば子どものふり遊びに関して、遊びの頻度や洗練さには愛着のタイプにより差異が見られることが示されてきた (e.g., Belsky, Gurduque, & Hmcir, 1984)。ふり遊びは眼前にある現実状況とは異なる別の状況を表象すること、他者の「ふり」に対し相手の表象を理解することなどを伴うと考えられ、心の理解能力の現れであるとして注目されている (e.g., Leslie, 1994; Perner, 1991; Harris, 1992)。そして、愛着安定型の子どもは不安定型の子どもに比して、ふり遊びにおける他者の視点の認識に優れ、それに沿った適切な振る舞いをしやすいのだと言われている (Slade, 1987)。また、心的状態の重要な側面である情動の知覚に関しても、愛着安定型の子どもの方がより優れた能力を示すことなどが報告されている (Laible & Thompson, 1998; 2001)。

さらに近年、これらの知見に加えて、愛着と「心の理論」の発達との関連を直接的に問う研究がいくつか実施され始め注目を集めている。Fonagy, Redfern, & Charman (1997) は、3～6歳児を対象とする研究から、子どもの年齢を統制後も愛着安定型の子どもの方が不安定型の子どもよりも「心の理論」課題において優れた成績を示すことを明らかにしている。なお、このFonagyらによる研究は愛着の安定性と子どもの心的理解能力の同時期的連関を示したものであるが、さらにMeins, Fernyhough, Russell, & Clark-Carter (1998) は、乳児期に測定された愛着のタイプとその後の心的理解の能力との関連を縦断的に問うている。そして、1歳時に測定された愛着の安定性と、4歳時における誤信念理解能力、さらには5歳時における心的理解能力との間に有意な関連を見出しているのである。愛着と「心の理論」の発達について直接的に検討した研究は現在のところ相対的に希少ではあるが、実施された研究が示す結果は、それらの間に有意な関連が認められることを支持している。これらより、子どもが発達早期から継続的に経験する養育者との関係性が、何らかの形で後の子どもの心的理解能力に影響する可能性が示唆されたと考えられよう。またさらに、先に概観したように心の理解の発達を乳児期から幼児期に亘る継続的・漸次的プロセスとして捉えていく際、養育者との関係という発達早期から長期的に続く社会的環境が持つ影響を考慮することの重要性を指摘しているものと思われる。

5. 養育者との関係に潜在する心的理解の発達の促進因とは

では、安定した愛着関係の中に、子どもの心の理解を促進するような如何なる要因が含まれているのだろうか。この問題に先駆的に取り組んでいる研究者の一人であるFonagyは、心的理解の発達の起源を乳児期からの子ども - 養育者関係の中に据え、安定した愛着関係の形成と心的状態の理解の促進的発達について考察を行っている。そして、安定した愛着関係が築かれるプロセスと、子どもの心的理解の発達が促進されるプロセスは重複すると考え、その双方にとって重要な役割を果たすような、養育者が有する特徴に着目している。それは、高い「敏感性 (sensitivity)」である。敏感な養育者は、「子どものシグナルに気づき、正確に解釈し、適切かつ敏速に応答する」とされ、従来「敏感性」は子どもの愛着の安定性を予測する養育者側の要因として重視されてきた (Ainsworth et al., 1974)。そしてFonagyは子どもの心的理解の発達を促進するものとして、この敏感な養育を支えている高度な「内省機能 (reflective function)」に注目している。内省機能とは、自他の行動を心的状態という観点から理解しようとする傾向であるとき

れ、意識的に行われる自己に向けられた「内省」ではなく、むしろ前意識的に人々の行動を心的状態に照らして解釈してしまうような半ば自動的な手続きだという。そして、この内省機能を高く有することが、子どもの状態を読みとり、適切に応じる、すなわち敏感な関わりを可能にするのだと考えられている。養育者の内省機能は自分の子どもとの相互作用に反映され、子どもの行動は心的状態に動機づけられたものとみなされる、すなわち子どもは心的行為者として扱われることになる。そして、日常のやりとりの中で、例えば幼い子どもの表情の背後に養育者が心的状態を読みとり、そこで解釈された内容が表情や言葉を通して子どもに伝えられる。この養育者による「映し出し」によって、子どもは自分自身の心的状態の存在を知覚しうようになるのだという。子ども・養育者間の間主観のプロセス、養育者による子どもの心的状態の映し出しを通して、子どもは自己が信念や欲求といった心的状態を有する存在であること、自分そして他者の行為はそれらによって決定されていることを理解するに至るのだと考えられているのである (Fonagy & Target, 1997; Fonagy, 2002)。(なお、Fonagyの議論は本来、愛着の世代間伝達を前提としている。すなわち、自分自身が敏感性の高い養育者のもとで安定した愛着関係を享受し、その中で内省機能を高め得た養育者が、その高い内省機能をもって今度は自分の子どもに対する敏感な関わりを行い、子どもの安定した愛着関係につながるのではないかという連鎖が想定されているということに触れておく。)

さらにまた、Meinsも同様に愛着安定型の子どもの養育者が有する特徴に注目し、子どもの心的理解能力の促進的発達について考察を行っている (Meins, 1997)。そこで注目される養育者の特徴は、新たに“mind-mindedness”と名付けられたものである。それは、発達早期から子どもをすでに心的世界を有した独立した存在であると捉え、子どもの言動を背後に存在する（と想定された）心的観点から理解しようとする傾向と定義されている。そして、愛着安定型の子どもの養育者の方が“mind-mindedness”をより豊かに有しているのではないかと仮定されているのである。例えば自身の一連の研究において、愛着安定型の子どもの養育者は不安定型の子どもの養育者に比して、言語獲得以前の19ヶ月児の発話を既に意味を伴うものであると捉えやすいこと、また、3歳の子どもの身体的・行動的特徴よりも心的な特徴に焦点化した叙述を行いやすいことを示している (Meins, 1997; Meins et al., 1998)。さらに近年、子どもが6ヶ月時における子どもの注意方向の変化への応答や、子の心的状態に対する言及といった“mind-mindedness”と潜在的に深く関わるような複数次元の行動の産出頻度と、乳児が1歳時に測定された愛着の安定性に関連を見出し、愛着安定型の子どもの養育者が“mind-mindedness”をより豊かに有している可能性を裏付けている (Meins, Fernyhough, Fradley, & Tucky, 2001)。

Meins (1997)によると、この傾向を高く有する養育者は第一に子どもとの間で心を絡ませたやりとりを頻繁に行い、心的状態を表す語彙を子どもに付与することが多いと想定されている。こういった、子どもの潜在的な心的状態への頻繁な名付けは、子どもにとって心的概念を獲得する足場として機能すると考えられよう。また第二に、子どもとの相互作用において三項的、つまり玩具などを介したやりとりを展開しやすく、さらに発達早期においてはたとえ形式的であっても子どもと「対話的やりとり」を実践することが多いと想定されている。「対話的やりとり」を経験することは、ある同じ対象、出来事に対する自己と他者の心的状態の出会いをもたらし、その一致や相違に関する気づきや理解を高めるという点で、心的理解の発達にとって重要であると

されている (Fernyhough, 1996)。このように、養育者の “mind-mindedness” が子どもとの相互作用の在り方に影響し、それを通して子どもの心的理解の発達が促進されると考えられているのである。

6. 発達を支える養育者の役割の再考

以上のように、子どもの心的理解の発達について養育者との関係性が与える影響を考える際には、養育者による子どもの心的状態への焦点化が重視されてきたと言えよう。Fonagyあるいは Meinsらによって示された、生後まもなくから開始される養育者との相互作用の中で、子どもの心に焦点化した養育者からの働きかけを経験することが、子どもの心的理解を支え促すとするこれらの主張に、基本的な齟齬はないように思われる。しかし、一見、同次元に見えるこれらの理論的説明には、実は異質の要素が含まれてしまっているのではないだろうか。それぞれの理論的説明で重要とされている養育者による子どもの心的状態への注意の向け方には、根本的な性質の差異が存在するのではないかと考えられるのである。そこで、子どもの発達に影響を及ぼしうると考えられている養育者の役割について、以下詳細に再検討してみることとしたい。

6-(1). “sensitivity” の中核的要素

まず、養育者の「感性」を重視する見解では、Ainthworthらの元々の定義に従うと、「子どもの心理的、生理的状态を正しく読みとる」ことが最も大きな意味を持つと想定されている。つまり、養育者が子どもの潜在的な状態を「正確」に把握し、それを子どもに「正確」に映し出すことの重要性が主張されているのである。敏感な養育者による、子どもの心的状態の探索ならびにその刻々の変化の観察こそが、子どもが自己を心的行為者として理解することを支える鍵であるとされる (Fonagy, 2001)。そこでは子どもの心的状態と、養育者によるその読みとりの「合致」が肝要とされ、その合致があつてこそ、養育者による映し出しを通して子どもは自分自身の心的状態を正確に知覚することが可能になると考えられているのである。したがって、養育者による読みとりの「適切さ」という側面が、この理論的説明においては中心的役割を担っていると言えよう。

6-(2). “mind-mindedness” の中核的要素

一方、Meins らによる説明で重視されているのは、実は幼い子どもに対して心的状態を豊かに帰属するという態度そのものであると考えられる。なぜそういった帰属が子どもの発達に促進的に機能しうのかという点について、子どもの思考や言語など高次精神機能の発達に対する社会的相互作用の重要性とその機能を示唆するヴィゴツキー理論に依拠した説明が行われている。ヴィゴツキーによれば、高次精神機能の発達は、最初是对人関係における「精神間」機能として現れ、次いで個人内における「精神内」機能として現れるのだとされる。そして、「精神間」から「精神内」への移行は、対人関係における相互作用の内在化プロセスを経て実現されるのだという (Vygotsky, 1978など)。子どもの心的世界に対する理解が養育者との相互作用の内在化によって促されると想定するならば、その現実の相互作用の具体的な在り方が子どもの種々の発達に影

響するものと考えられよう。そして、豊かな“mind-mindedness”に基づく、発達早期からの子どもの感情、欲求や意図といった心的状態への働きかけは、子どもの発達状態に照らして実際よりもやや「高め」のところに働きかけている（すなわち実際には「潜在的」な状態をすでに確かに存在するものとして扱う）とも考えられ、それが結果的に子どもの心の理解についての「発達の最近接領域」を適切な形で刺激することになるのではないかと論じられている（Meins, 1997）。精神間における、つまり養育者が存在することで始めて展開が可能になる（子どもの実態に照らすとやや発達の進んだ）心的世界に絡む相互作用の経験が豊富であることは、その精神内への内在化をよりスムーズに、容易な形で可能にさせるという意味で、子どもの心的理解の発達にとって重要であると考えられるのである（Fernyhough, 1996）。

したがって、この理論的立場においてより重要となってくるのは子どもの心的状態の「適切な読みとり」ではなく、子どもの実態に照らすと時にやや「過剰」とも言える豊かな心的状態の帰属であると考えられよう。例えば、養育者が空腹状態にある乳児に対し「おっぱいが欲しい」という欲求を読み込むこと、さらには空腹が満たされた後に「おいしいかった。ありがとう」という養育者に向けた感情を乳児に帰属して仮想的な対話を作り上げてしまうというような行為には、乳児が実際に有している心的状態に照らしてやや進んだ、拡張された要素が含まれているとも言えるわけだが、まさにこうした心的状態の豊かな帰属、それに基づく相互作用こそが子どもの実態としての心的理解を引き上げるのではないかと想定されているのである。

このように、子どもの心に焦点化した相互作用の重要性を主張する一見同種の理論的説明においても、その背景に想定された子どもの発達を支えるメカニズムは異なり、それぞれが強調する養育者の役割は性質を大きく異にするものであると考えられよう。そして、乳児が潜在的に有する心的状態の適切な読みとりと、あるいは実態に照らしてやや拡張された心的状態の帰属は、おそらく先述したようなそれぞれの理論的根拠から共に子どもの心的理解の発達にとって非常に重要な役割を持っていると思われる。だからこそ、一元的に捉えられがちな養育者による子どもの心的状態への焦点化におけるこれらの差異を、微細なものとして度外視することはできまい。なぜなら、それらを同義に捉えてしまえば、それぞれが子どもの心的理解の発達にどう影響しうるのかを精緻に問うことが困難となるためである。ともに重視されている子どもの心的状態の「適切な読みとり」と「豊かな帰属」を峻別した上で、各々が持ちうる子どもの発達への影響を明らかにしていくことが必要なのではないだろうか。

7. 今後の実証研究に向けて

前項までの議論を踏まえ、今後は子どもの心的状態の適切な読みとりと、豊かな心的状態の帰属の双方を研究の中で同時かつ独立に捉え、それぞれによる子どもの発達への寄与の可能性について詳細を明らかにしていくような実証的研究の実施が求められよう。そこで次に、実証研究に向けた具体的な検討を行うこととしたい。

7-(1). 養育者の特徴をどう捉えるか

実証にあたりまず課題となるのが、子どもの心的状態の「適切な読みとり」と「豊かな帰属」

という混同されがちな2つの側面に現れる養育者の特徴を如何に測定するかという点である。子どもが日常で経験している相互作用の相手の特徴を精緻に描き出していくことは、社会的環境からの影響を検討しようとする際には特に重要な問題である。そこでまず、この点について具体的検討を行う必要性は高いと考えられよう。

7-(1)-a. “sensitivity” の測定

子どもの心的状態を適切に読みとる傾向に見られる個人差を測定する方法としては、養育者の敏感性の重要性を提示したAinthworthら自身によって開発された評定法が参考になるだろう。それは、相互作用場面の観察に基づき、養育者の乳児に向けられた行動が敏感なものであるか、すなわち「子どものシグナルに気づき、迅速かつ適切に応答」するものであるかを評定するものである (Ainthworth et al., 1974)。養育者の行動の「適切さ」に関してはさらに、養育者と子どもの行動が相互に影響しあうものであることを考慮した「情緒的利用可能性 (emotional availability)」についての議論も有効な枠組みを提供していると考えられる (Biringen, 2000)。その議論の中では、養育者-子ども関係においてより重要なのは、従来注視されてきたような養育者側からの視点のみに依拠した「敏感さ」「迅速で的確な応答」というよりもむしろ、あくまで「子どもにとって」必要な時に必要な応答を養育者から得ることが可能かどうかということであると指摘されている。したがって「情緒的利用可能性」には養育者側と子ども側のそれぞれに次のような下位要素が独立に想定されている。まず養育者側には「敏感性 (子どものサインへの正確な理解と応答)」「構造化 (相互作用へのルールや枠組みの付与)」「侵略的でないこと」「敵意がないこと」という4側面が設けられている。そして、養育者による子どもへの応答、並びにその適切さは子ども側からの行動の存在に依存すると考えられることから、子ども側には「やりとりへの養育者の引き込み」「養育者への応答性」の2要素が想定され、養育者と子どもが互いに影響しあうものであることが考慮されている。なお、元来「情緒的利用可能性」は養育者-子ども間の関係性の質を記述する指標として呈示されたものであるが、そこで示された養育者の子どもに向けられた行動の性質に関する考察は非常に示唆に富むものであり、養育者側の特徴を描く際にこれらの指摘を援用することは有益であろう。したがって、養育者の子どもへの応答の適切さを考える際には、単に子どものサインの正確な理解、速やかな応答といった点にとどまらず、それが子どもにとってどんな意味を持ちうるのか、眼前の子どもにとって有効で、不満や怒りといった敵意に満ちたものではないか、子どもの自律性を脅かすような侵略的なものではないか、ということにも同時に留意していく必要があると思われる。これらより、養育者が子どもの心的状態を適切に読みとる傾向を捉えていく際には従来の「敏感性」の評定にとどまらず「情緒的利用可能性尺度」(Biringen, Robinson, & Emde, 1998) 等をも参照し、子どもにとっての適切さを視野に入れた測定を行っていくことが求められよう。

7-(1)-b. “mind-mindedness” の測定

次に、養育者が子どもに豊かな心的状態を帰属する傾向についてはどのような測定方法が考えられるだろうか。実は当初 “mind-mindedness” は説明概念として提唱されたものであったのだが、現在までにその個人差を直接の測定対象とするいくつかの試みが開始されている。例えば、先述のMeins et al. (2001) では、子どもの心的状態への言及、子どもの注意への応答や自律的活動の援助といった複数次元の行動が、養育者による子どもの心的世界の想定に関連するものであると

され、子どもとの相互作用場面で観察されたこれらの行動の産出頻度が養育者の“mind-mindedness”の個人差指標として扱われている。だが、最近のMeins自身の研究では、これらの指標の中で子どもの心的状態への言及のしやすさが特に注目されている。そして、養育者によるそれらの言及を子どもの行動や文脈に照らして適切なものであるか否かに分類し、「適切な言及」の豊富さをもって“mind-mindedness”の個人差の指標としているのである（Meins, Fernyhough, Wainwright, Gupta, Fradly, & Tucky, 2002; Meins, Fernyhough, Wainwright, Clark-Carter, Gupta, Fradly, & Tucky, 2003）。しかし最近採られているこの方法は、養育者による子どもの心的状態の言及における「適切さ」に注意が向けられ、それはむしろ先に挙げた「敏感性」の測定になってしまっているのではないだろうか。この方法では、元来の“mind-mindedness”概念が有していた独自性が測定段階で「敏感性」寄りに縮小されてしまっていると言わざるをえない。よって、時に過剰とも言えるような心的状態の帰属の豊かさに現れる養育者の個人差を敏感性ととは明確に峻別し、“mind-mindedness”本来の概念規定を活かす形で測定していくことが必要であろう。

これに関して、篠原（2004）は「適切さ」という観点ではなく、養育者がどれくらいの頻度でどれくらい多岐に亘る内容の心的状態を子どもに帰属するのか、さらには帰属する内容に養育者によって偏りがあるのか否かを捉えることを目的とした測定方法の案出に取り組んでいる。そこではこれらの個人差の測定をよりの確に、また効率的に行うために実験的手法が採られ、複数の養育者に共通する乳児のビデオ刺激を呈示した際の、それに対する心的状態の帰属に見られる養育者間の差異が注目されている。なお、6ヶ月児の母親を対象とする実験の結果からは、共通する乳児刺激に対する心的状態の帰属の頻度には母親間で幅広いばらつきが見られ、帰属する具体的な内容も異なること、また、母親によって複数の刺激に亘って全般的に欲求状態を帰属しやすい、あるいは思考状態を想定しやすいといった偏りが見られることなどが示されている。例えばこういった実験的な測定方法などを用いながら、読みとりの適切さとは区別されるものとして、心的状態の帰属の豊かさに現れる養育者の個人的特徴を正確に捉えていくことが求められるのではないだろうか。

7-(2). 心的理解の発達の何にどう寄与しうるのか

上での具体的な測定方法の議論を踏まえ、今後は養育者の敏感性と“mind-mindedness”を同時に、しかも独立に測定しつつ、さらにはそれぞれが子どもの心の理解の発達にどう寄与しうるのかを実証的に明らかにしていくことが必要であると思われる。特に、心の理解を乳児期から漸次的に進むプロセスとして捉える際、養育者のそれぞれの働きが子どもの発達過程におけるどの時期に、発達のどの側面に絡んでくるのかという問いは重要である。例えば養育者の特徴と幼児期における「心の理論」課題の成績といった連関を問うだけではおそらく不十分であり、養育者の特徴が、子どもとのどういった具体的な関わりを通して、乳児期から見られ始める心的理解に関係した諸行動のそれぞれの発現に影響しうるのかを問う長期継続的な視点が求められよう。

これに関して、養育者の特徴と子どもの心的理解能力の関連を直接問うものではないが、先に触れた篠原（2004）では子どもが6ヶ月時に測定された母親の豊かな心的帰属のしやすさと、子どもが6ヶ月時と9ヶ月時における子どもへの関わり方との関連が検討されている。そして実際

に、両時点において“mind-mindedness”の高さと母親による子どもの心的状態への言及頻度との間に有意な関連が認められている。また、“mind-mindedness”を高く有する母親は、子どもが6ヶ月の時、子どもの注意の在処を同定しそれに養育者自身の注意を重ねる「注意追従型」の関わりをより多く行っていることが示されたのだが、子どもが9ヶ月になった時点ではこの関連は認められなかったという結果が得られている。他者との注意の共有状況をより多く経験することは、対象に向けられた自他の心的見解への気づきや理解を支える足場になる可能性が考えられるが、“mind-mindedness”の高い母親が、意図的な行動をとり始めると想定されている9ヶ月以前の乳児の視線を意味あるものとして捉え、自身の注意を重ねる行動を多く見せることは興味深い。もちろん、こういった母親との相互作用の経験の差異がその後の子どもの発達にどう帰結するかという知見は得られていないために性急な解釈は避けるべきであるが、“mind-mindedness”は特に発達早期において、子どもに対する関わり方を左右し、それを通して子どもの発達に重要な意味を与えうるのかもしれない。子ども側の心的状態の存在がまだ十分に明確でない発達初期において、養育者が子どもの言動に多分に意味を読み込み、潜在的な心的状態を拡張させて関わりを行うことが、結果的に子どもの心的世界への気づきと理解における有効な足場として機能し、促進的な影響を与えうるのではないだろうか。そしてその後、成長に伴い子ども側に心的状態が実態として存在し始めると、それを適切に読みとり応答する関わりが、子ども自身の心的状態の正確な知覚を支え、より中核的な役割を担うようになっていくのかもしれない。またあるいは、養育者による心的状態の帰属と、適切な読みとりは、子どもが実態としての心的状態を備え始めるにつれ、現実的に重なり合うものになっていくという可能性も考えられよう。

無論、これらは現段階では推論の域を出ないものであり、養育者による心的状態の適切な読みとりと、豊かな帰属のそれぞれが、子どもの心的理解の発達のどの時期に、どう絡んでくるのかを示す知見が蓄積されることへの期待は大きい。養育者のこういった働きが、例えば共同注意の成立や原叙述のコミュニケーション行動の産出、心的語彙の理解や使用、さらには「心の理論」の獲得といった各発達段階における心的理解の諸相に如何に寄与しうるのかを、縦断的に問うていく実証研究の実施が求められよう。また、本論では理論的考察に基づき養育者の二つの役割を区別して捉えていくことの必要性を述べてきたが、真にそれらが峻別されるべきものであるかということについても、実証的検討に付す必要があろう。養育者の「感性」と「心的状態の豊かな帰属」を独立に測定した上で、それぞれが子どもの心的理解の発達に特異な影響を持ちうることが検証されれば、両者を峻別することの意義が明らかになると思われる。また、峻別していくことの必要性が支持されたならば、今後それぞれを養育者の特性として二軸に据え両者の強弱等を考慮しながら、子どもの心の理解の発達に如何なる貢献をすると考えられるのかを精緻に明らかにしていくことが求められよう。

8. むすび

以上、本論では子どもの心的理解の発達について、子どもを社会的環境の中で育ちゆく存在ととらえ、他者との社会的相互作用、特に生後まもなくから緊密に結びつく養育者-子ども間の相互作用が及ぼす影響に注目して検討してきた。そして、養育者が子どもの心に焦点化したやりと

りを実践することが従来重視されてきたのだが、そういったやりとりの背後には、子どもの心的状態の適切な読みとり、あるいは時に過剰とも言えるような心的状態の豊かな帰属という性質の異なる二つの働きが存在している可能性を指摘した。それらは共に、非常に日常的な養育者の行為であると思われるものの、子どもの心的理解の発達にとって果たしてどんな意味を持ちうるのかは、実は未だ十分に明らかにされているとは言い難い。子どもが日々経験する養育者とのやりとりに密着し、その中に織り込まれた如何なる要素が、如何なるメカニズムによって、目に見えない心的世界への理解を支え促しているのかを実証的に検討していくことで、養育者が持ちうる役割についてのより詳細な実りある知見が得られるのではないだろうか。

謝 辞

本論文の作成にあたりご指導いただきました、遠藤利彦先生に深く感謝申し上げます。

引 用 文 献

- Ainsworth, M.D.S., Bell, S.M., & Stayton, D.J. (1974). Infant-mother attachment and social development : Socialization as product of reciprocal responsiveness to signals. In M.P.M.Richards (Ed.), *The introduction of the child into a social world* (Pp.99-135). London: Cambridge University Press.
- Astington, J.W. (1993). *The child's discover of the mind*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Baron-Cohen, S. (1995). *Mind-blindness: an essay on autism and theory of mind*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Bartsch, K., & Wellman, H.M. (1995). *Children talk about the mind*. New York: Oxford University Press.
- Belsky, J., Gurduque, L., & Hrcir, E. (1984). Assessing performance, competence and executive capacity in infant play: Relations to home environment and security of attachment. *Developmental Psychology*, **20**, 406-417.
- Biringen, Z. (2000). Emotional Availability: Conceptualization and research findings. *American journal of Orthopsychiatry*, **70**, 104-114.
- Biringen, Z., Robinson, J.L., & Emde, R.N. (1998). Emotional Availability Scale. Unpublished manuscript: University of Colorado Health Science Center.
- Bretherton, I. (1991). Intentional communication and the development of an understanding of mind. In Frye, D. & Moore, C. (Eds.). *Children's theory of mind* (Pp.49-75). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Brown, J.R., & Dunn, J. (1991). You can cry mam: The social and developmental implications of talk about internal states. *British Journal of Developmental Psychology*, **9**, 237-256.
- Cole, K., & Mitchell, P. (1998). Family background in relation to deceptive ability and understanding of the mind. *Social Development*, **7**, 181-197.
- Cutting, A.L., & Dunn, J. (1999). Theory of mind, emotion understanding, language, and family background: Individual differences and interrelations. *Child Development*, **70**, 853-865.
- Dunn, J. (1988). *The beginnings of social understanding*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Dunn, J. (1996). Children's relationship: Bridging the divide between cognitive and social development. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, **37**, 507-518.
- Dunn, J. (2001). Mindreading, emotion understanding, and relationships. In. Bennett, M. (Ed.). *Developmental Psychology: Achievement and prospects* (Pp.167-176). NY: Psychology Press.
- Dunn, J., Brown, J., Slomkowski, C., Tesla, C., & Youngblade, L. (1991). Young children's understanding of other people's feeling and beliefs: Individual differences and their antecedents. *Child Development*, **62**, 1352-1366.
- Fernyhough, C. (1996). The dialogical mind: A dialogic approach to the higher mental functions. *New Ideas of Psychology*, **14**, 47-62.

- Flavell, J. H. (2002). Development of children's knowledge about the mental world. In: Hartup, W. & Silbereisen, K. (Eds.). *Growing points in developmental science: An introduction* (pp.102-122). NY: Psychology Press.
- Fonagy, P. (2002). Understanding of mental states, mother-infant interaction, and the development of self. In: Martín Maldonado-Durán, J. (Eds.). *Infant and toddler mental health: models of clinical intervention with infants and their families* (pp.57-74). Washington, D.C.; London: American Psychiatric Pub.
- Fonagy, P., & Target, M. (1997). Attachment and reflective function: Their role in self-organization. *Development and Psychopathology*, 9, 679-700.
- Fonagy, P., Redfern, S., & Charman, A. (1997). The relationship between belief-desire reasoning and positive measure of attachment security (SAT). *British Journal of Developmental Psychology*, 15, 51-61.
- Gopnik, A. (1996). Theories and modules: Creation myths, developmental realities, and Neurath's boat. In: Carruthers, P., & Smith, K. (Eds.). *Theories of theories of mind* (pp.169-183). Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Gopnik, A., & Melzoff, A. N. (1994). Mind, bodies and persons: Young children's understanding of the self and others as reflected in imitation and 'theory of mind' research. In: Perker, S., Mitchell, R., & Boccia, M. (Eds.). *Self-awareness in animals and humans* (pp.166-186). New York: Cambridge University Press.
- Harris, P. L. (1992). From simulation to folk psychology: The case for development. *Mind & Language*, 7, 120-144.
- Jenkins, J., & Astington, J. W. (1996). Cognitive factors and family structure associated with theory of mind development in young children. *Developmental Psychology*, 32, 70-78.
- Laible, D. J., & Thompson, R. A. (1998). Attachment and emotional understanding in preschool children. *Developmental Psychology*, 34, 1038-1045.
- Leslie, A. M. (1994). Tom and Toby: Core architecture and domain specificity. In: Hirschfeld, L. A. & Gelman, S. A. (Eds.). *Mapping the mind: Domain specificity in cognition and culture* (pp.119-148). New York: Cambridge University Press.
- Meins, E. (1997). *Security of attachment and the social development of cognition*. East Sussex, UK: Psychology Press.
- Meins, E., Fernyhough, C., Russell, J., & Clark-Carter, D. (1998). Security of attachment as a predictor of symbolic and mentalising abilities: A longitudinal study. *Social Development*, 7, 1-24.
- Meins, E., Fernyhough, C., Fradley, E., & Tuckey, M. (2001). Rethinking maternal sensitivity: Mothers' comments on infants' mental processes predict security of attachment at 12 months. *Journal of Child Psychology and Psychiatry and Allied Disciplines*, 42, 637-648.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Das Gupta, M., Fradley, E., & Tuckey, M. (2002). Maternal mind-mindedness and attachment security as predictors of theory of mind understanding. *Child Development*, 73, 1715-1726.
- Meins, E., Fernyhough, C., Wainwright, R., Clark-Carter, D., Das Gupta, M., Fradley, E., & Tuckey, M. (2003). Pathways to understanding mind: Construct validity and predictive validity of maternal mind-mindedness. *Child Development*, 74, 1194-1211.
- Perner, J. (1991). *Understanding the representational mind*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Perner, J., Ruffman, T., & Leekam, S. L. (1994). Theory of mind is contagious: You catch it from your sibs. *Child Development*, 65, 1228-1238.
- Repacholi, B., & Slaughter, V. (2003). *Individual differences in theory of mind: Implications for typical and atypical development*. NY: Psychology Press.
- Ruffman, T., Perner, J., Naito, M., Parkin, L., & Clements, W. A. (1998). Older (but not younger) siblings facilitate false belief understanding. *Developmental Psychology*, 34, 161-174.
- 篠原郁子. (2004). 母親の“mind-mindedness”と母子相互作用の関連性について—生後6ヶ月から9ヶ月にかけての縦断的研究—. 京都大学大学院教育学研究科平成16年度修士論文 (未公刊).
- Slade, A. (1987). Quality of attachment and early symbolic play. *Developmental Psychology*, 23, 78-85.
- Tomasello, M. (1995). Joint attention as social cognition. In: Moore, C., & Dunham, P. (Eds.). *Joint attention: Its*

篠原：子どもの心的理解の発達を支えるものとは

- origins and role in development* (pp.103-130). Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Vygotsky, L.S. (1978). *Mind in society: The development of higher psychological process*. (Cole, M., John-Steiner, V., Scribner, S., & Souberman, E. (eds.)). Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Wellman, H.M., Cross, D., & Watson, J. (2001). Meta-analysis of theory-of-mind development: The truth about false belief. *Child Development*, 72, 655-684.

(日本学術振興会特別研究員・博士後期課程1回生，教育方法学講座)

(受稿2004年9月9日，改稿2004年11月19日，受理2004年11月30日)

Rethinking the Role of Maternal Sensitivity and Mind-Mindedness in the Development of Child's Mind-Understanding

SHINOHARA Ikuko

It has been reported that the understanding of the internal world is evolved and achieved in a child's context of social relationships. Especially, it is accepted that the relationship with parents in infancy has a central function in the development of mind- understanding. In this paper, I first review various studies on early social relationships and the child's performance of mind-understanding such as 'theory of mind' tasks. Second, I describe the importance of the interaction, which a parent focuses on the infant's mental state. Then I point out two kinds of parent's roles; "sensitivity"—the ability to read and interpret an infant's mental state appropriately, and "mind-mindedness"—the proclivity to attribute an internal state to the infant and to treat him/her as an individual with a mind of his/her own. Finally, I suggest the requirement of an empirical investigation to reveal how each of them can contribute towards the infant's development.